

【はじめに】

東日本大震災から、既に 2 カ月が経過したが、そういった中で「M2M(エムツーエム)」市場は着実に市場拡大しつつある。最新の「M2M(エムツーエム)」ビジネスが実態的にどの程度進み、短期的かつ長期的に見てどういった分野(セグメント)でどの程度の市場(規模)が見込めるのか? 時間軸別に市場浸透ロードマップを客観的にチェックし、「M2M(エムツーエム)」先端&有望ビジネス・シーズの「セグメント&ビジネスモデル別 有望度評価」「セグメント&ビジネスモデル別(実態/潜在)市場規模」を定点観測しながら多面的且つ網羅的に市場全体を俯瞰することが継続的に求められている。

「M2M(エムツーエム)」の定義・範囲は各社によってマチマチで異なるが、一般的にはマシン・ツー・マシンを M2M(エムツーエム)と呼んでいる。ただ、一方で機械からヒト(M2P:エムツーパーソン)、ヒトから機械(P2M:パーソンツーマシン)といった概念や考え方も存在する。なお、M2M(ビジネス) 通信モジュール(関連ビジネス)とするベンダと M2M(ビジネス) 通信モジュール(関連ビジネス)とするベンダと大きく 2 つに分かれているのも現状である。一般的に定義を調べてみると、ウィキペディアでは、M2M(エムツーエム、Machine-to-Machine または Machine-to-Management の略)とは、ネットワークに繋がれた機械同士が人間を介在せず相互に情報交換し、自動的に最適な制御が行われるシステムと定義している。

M2M(エムツーエム)の定義・範囲、認識が各社によって異なるものの、「M2M(エムツーエム)」社会における、さらなる IT 利活用の高度化や多彩なサービスの実現には、ヒト・モノ・エリア(周辺環境等)の状況を正確に感知(センシング)・認識し、状況や(屋外、屋内、その中間といったエリア・セグメント毎の)環境に即した最適なサービス、ソリューションへと結びつけるための、ユビキタス・センサーネットワーク技術や各種組み込み技術、データマイニング、分析、解析技術、ソフトウェア更新技術、同時通信技術、MIB(マシンインフォメーションベース)関連技術、パケット着信技術、セキュリティ技術、画像認識、キーワード検索技術などといった技術要素が不可欠となっている。

この一連の技術の実現により、「自販機、飲料自販機、各種販売機」「決済系。例えばタクシーのカード決済端末、モバイル決済、クレジットのカード決済などで通信機能を使っているところ」「電気、ガスといったインフラ(自動検針用等)」「車両運行管理、運行・配送管理、車載用、自動車メーカーの電気自動車に搭載、車、テレマティクス、自動車関係等」「営業支援」「保守支援、保守(サービスマン)、メンテナンス業者、電気設備の保守を展開している事業者(***保安協会の関連する企業)」「計測制御・遠隔監視、遠隔制御」「在庫管理」「音声が使えらる端末」「コピー機やプリンターなど(事務機器、OA 機器、イメージング業界)」「エコ関係×電力監視&制御、電力メーター、電力計測」「スマートグリッド市場、太陽光を含めたスマートグリッド系、省エネ」「工作機械」「データセンター」「単価の高い機器(小松、日立建機などの建機など)」「ロボット、ロボットのメンテナンス」「農業分野でフィールドサーバ、農業系の環境センサー」「HEMS(ホーム:家)」「BEMS、ビル」「RFID 関係(リーダー)」「プロジェクター」「トイレ×健康診断。例えば尿検査」「足湯」「牛の子供が産まれる際の体温(体温が上がった時にもうすぐ産まれる!といったデータを無線で飛ばす)」「タイヤメーカー」「工場(タンク残量、薬品系あるいは液化ガス)、製造業×工場の中でのファクトリーオートメーション、FA のメインライン、工場の装置のメンテナンス、産業系、エネルギー監視、設備保全(工場などの機器の設備保全)」「水道関係等・上水道の管理や下水道の管理をしている自治体<自治体で管理している上下水道>(マンホールポンプやプールの水質管理 マンホールポンプや水質管理)/温度、水の残量、水質を採取/タンクの残量監視、マンホールの監視、水質の監視/漏電があるかどうか?」「百貨店、店舗」「プリクラ」「川の水位を見る」「デジタルサイネージ」「POS」「監視カメラ」「医療関係、医療機器関係」「機器製品販売を行っている企業」「神戸製鋼や川崎

製鉄などの製鉄会社」「社会インフラ管理：保全分野。領域は公共社会インフラで橋梁、鉄道、電力設備、道路」「食の安全、食の安全衛生(工場の監視や衛生監視)」「コンビニ」「ビニールハウス(の温室の測定)」「屋上緑化」「地滑り」「温泉施設」等、幅広い社会・経済活動への寄与が期待されている。特に、今後の少子高齢化社会、省エネ(節電)・環境推進社会に向けて着実に安全・安心・エコな社会を実現するために「M2M(エムツーエム)」の果たすべき役割は大きいと言えるだろう。

今や「M2M(エムツーエム)」は産学官共に最も注目・期待しているポテンシャル・ビジネス・テーマの一つといえよう。「M2M(ビジネス)」に対する注目度が高まってから(2003年以降)というものの、「M2M(ビジネス)」の実態(実状)について定点観測したいといった要望(声)を数多くの企業(業種/部門)から引き続き頂いている。従ってESP総研では、最新の「M2Mビジネス(実態)市場」の全貌、将来の見通しを明確化するべく、当該主要企業・団体(9社)へのインタビューを多面的に実施し、2010年12月~2011年2月の間で顕在化している「M2M」応用分野(用途・重点ターゲット)43セグメントを抽出、ターゲティング分野別×ポテンシャル探索・評価、「M2M」関連ビジネス市場規模の算出を行った。特に重点を置いたのは43セグメント(応用分野)別「M2M(ビジネス)」のポテンシャル・ターゲット視野/重点ターゲット領域のクロス集計・分析、セグメント(ハードウェア販売(通信モジュールの販売など)/ソフトウェア・ミドルウェアの販売(ライセンス販売)、ソフトウェアの開発(受託開発含む)/ソリューション・SI/通信サービス(回線利用料収入)/ASPサービス提供)別「M2M(エムツーエム)」実態/潜在規模推移(2009年度~2013年度)といった将来予測である。

今回の調査によって、「M2M(ビジネス)」市場において、どの分野(セグメント)でどの程度の規模のマーケットが創出され、どのようなスピード(時間)とベクトル(方向性)で拡大していくのか?を多面的に調査した。この調査報告書が「M2M(エムツーエム)」関連ビジネスに着眼する全ての皆様のマーケティング活動に貢献できることを心から切に望むものである。